8　おわりに

8. おわりに

（1）プログラムを受講した学生の声

① O／OCF－PBL を受講しようと思った動機（あらためて振り返ってみてください）

・大学を楽しい場にし、それに加え自己成長したいと心から思ったため。座学では学べない体験をし、足を運んで行動することにより、もっともっと自分が成長し、輝けるのではないかと考えたため。

・1・2 回生の頃は、勉強（座学）の成績ばかり見ていて、主体的な活動に取組むことがゼロだったので、これではイカンと思い、何か自己成長できるものをと、見つけたのが PBL でした。

・私は工学部に所属しており、あまり人の前で発表したり、意見を交換し合うといったことがありません。このまま大学 4 年間を過ごして、社会に出た時、自分は成長したいと思い、受講しようと思いました。

・2 回生のうちから何か将来に繋がるものに取組みたいと思い、参加しました。

・文化学部なので、経済・経営のようにプレゼンやゼミで活発に活動する機会が少なかったので、大学生らしいことがしてみたいと思い、また、将来の就職活動に直接役に立つ社会人基礎力をつけたいと考えたから。

・高校の担任の先生（1 年生の時）が、この科目を勧めてくれたので。

② O／OCF－PBL の受講中、苦労したこと、困難だったこと

・チームで働くことです。課題を解決していく上で、メンバー同士の考えの違いや目指す方向性の違いなど学部も回生も違うメンバーが集まって活動していくことが苦労した面であり、逆に自己成長に結びつく面であったと思います。

・チーム内コミュニケーション

・そもそもこのような活動は何をどうすれば良いのか分からなかった。（と言うより、私の場合すべてです。）

・一番苦労したことは、意思疎通です。課題提供企業の方、また、チーム内で、お互いが求めていること、考えていることを共有するということがとても難しかったです。

・人が複数集まると、それだけで様々な考えが集まります。それが一番面白かったです。

・ 学部がバラバラのグループで集まるのに苦労した。インタビューするということであり 4 回生ということもあって人を探すのが大変だった。

・友人の遅刻癖。

③ O/OCF-PBL の受講を通して成長できたこと

・物事の捉え方が変わりました。O／OCF－PBL 受講前と比べると受身ではなく、能動的に「今、何をすべきか」「自分に不足している能力は何か」「自分の強みは何か」などを考えるようになりました。そして、どのようにして自分の能力（長所・短所を含む）を活かせるかを考え、そのための行動を取れるようになったと思います。

・コミュニケーション力、プレゼンテーション力

・社会人基礎力すべて

・②で述べた苦労したことを乗り越えることで、話す相手を理解しようとすることや、どのように話せば、相手に伝わるか考える姿勢が大事なんだと気づき、これは自分にとって大きな成長だと思います。

・様々な人に出会い様々な価値観に触れることができたことで人間的に成長できました。

・礼儀について、メールでのアポのとり方、コミュニケーション力、傾聴力

・チームの大切さやしんどさを理解しました。

④ O/OCF-PBL の受講を通して、社会人基礎力は身についたと思いますか？ あれば、どんな能力要素だと思いますか？

・あえて 1 つ挙げるとすれば、「働きかけ力」だと思います。メンバーに働きかけ巻き込んで活動していくには、まず物事に取組み（主体性）、次に計画を立て実行する（計画力、実行力）。もし問題が発生した場合は、相手の意見を聴いたり（傾聴力）、意見の違いを理解する（柔軟性）必要があると考えます。社会人基礎力の 12 の能力要素は相互関係があり、どこか 1 点を伸ばそうとすると、全ての能力が自ずと伸びるものと考えます。

・12 の要素はもちろんのこと「チームビルディングをする力」「意思共有をする技術」です。

・どの能力要素も、すこしずつ身についていると思いますが、その中でもチームで働く力、柔軟性が一番身についたのではないかと思います。
今では、こういう考え方もあるんだと思うことができるようになりました。

・社会人基礎力は日常のどんな行動にも結びつけることができます。これに、この活動を通して気づくことができました。

・相手の話をきちんと理解できる傾聴力がついた。以前より自分の意見、思いをうまく伝えられるようになった。

・人の話を聞く傾聴力がつき、他の授業もよく理解できるようになった。

⑤ その他、感想をご自由にお書き下さい。

・O／OCF－PBL に参加し、自分の強みや弱みも確認できました。それにより、強みをよ

り成長させるための行動、弱みを強みに変えるための行動ができたと思います。心から感謝しています。1 年間本当にありがとうございました。

・この取組みの全て(スタートから今日のこの日まで)自分のためになる学びができました。

・活動中は、辛くて、嫌になることもあったのですが、思い返すと、充実した時間を過ごすことができ、やってよかったと思っています。ありがとうございました。

・4 回生インタビューは、まとめるのがとても難しく、最後の方にあわてて集まる回数を増やしてバタバタしてしまったので、計画力の大切さを学びました。また、やはり一つのものを作り上げるためには、1 人ではできないので、仲間の結束力が本当に大切であることを知りました。私たちのチームは、もっとコミュニケーションをとることができれば、もっとより良いものにできたと思いました。

・人間として成長できた。

（２）プログラムを指導した教職員の声

① プログラムにおいて課題を指導していく過程で最も困難であったことは何か。またこれをどのような工夫により乗り越えたか。

―― 企業から提供される課題の内容が抽象的である場合、ゴールをどこに設定するかが非常に難しい。一方で日本の将来を見据えた企業戦略を考える、というような大きなテーマに学生の自由な発想で挑んでほしいという企業側の意図も理解できる。

しかし、大きなテーマであるほど、学生はまず書物や既存の資料で提供された課題の背景、現状を調べることに多くの時間を割いてしまい、ともすれば活動が机上だけで終わってしまいかねない状況となった。これに対して教員がどこまでディレクションするのかが非常に悩ましいところだった。

最終的には、残り時間も少なくなったところで教員から「一度現場に出てみないか」という提案をし、課題に関連する方たちの生の声を聞き、実体験を重ねることで自分たちのスタンスを決め最終提案への突破口となった。

―― 提供課題に関連してもう一点。「社会人基礎力育成グランプリ」に挑戦するならば学生が取り組む課題は授業の半年間である程度具体的な形になるもの、成果が明確なものが求められるが、課題によってはその時間では足りない。しかし一方で現実のビジネスでは日々決まった答えのない問いに挑戦し続ける場面の連続。学生たちにとっては抽象的で大きなテーマに取組み、必死で自分たちなりの答えを見つけていくことも重要である。このジレンマに教員がどう関わっていくかが課題となった。

この問題について「乗り越えた」とはいい難いが、大学という教育の現場では、短期的な成果だけでなく、長期的な視点に立って学生の成長を促すということもやはり重要であり、この基本を押さえた上でグランプリなどには取組んでいく必要があるのだろう。

――　本学が提供した「カリキュラムマップ（どの科目をどのように履修し、どんな力を付けていくかという科目選択に関するロードマップ）を作成する」という課題に取組むクラスを担当した。この課題はあくまで大学教育を過去に修了した大人の視点から出されたものであり、現役の学生にとってはカリキュラムマップそのものがどんなものか、どのような意義があるのかというイメージが当初持てなかった。それでも大学側にヒアリングを重ねるなどして取組みを進める中で、そのイメージを掴んだ彼らが取った行動は、課題である「カリキュラムマップ」を作成するのではなく、そもそも自分たちがどんな大学生活を送りたいのか、そのためにはどんな経験を積み重ねればいいのかを仲間たちに示す、というものだった。課題の意図するものとは違う方向へ走り出した彼らに教員として口を出そうかどうかかなり迷ったが、学生の自主性に任せて待ってみることにした。

結果的に出来上がった作品は当初大学が求めたものからは外れていたものの、現実の学生、とりわけこれから大学生活を充実させたいと願う１年生に受け入れられ、その道を指し示すものとなった。答えありき、の活動ではない面白さを改めて実感している。

――　1 年生の授業において実感したことは、自己肯定感の低い学生の多さ。自分のできていること、よかったことを自分で認めることができず、授業終了後に記入するゴールセッティングシートなどにもできなかった「反省の弁」ばかりが書き連ねられている。自分を認められないが故に他者に対しても厳しくなったり、もしくは他者と比べて自己を卑下するという関係性に陥っているように思われる。この根深い「習慣」を何とか変えていくために、授業内で個別に声をかけ小さなことでも誉めることはもちろん、授業終了時に「承認タイム」を設け、グループ内で互いにその日よかった点、がんばっていた点などを指摘しあい言ってもらえた言葉をゴールセッティングシートに記入させた。また、回収したシートに教員から赤ペンで一人ひとりによかった点、できた点をコメントし翌週返却するということを続けた。個人差はあるものの、「〇〇と言ってもらえたことが嬉しかった」と自身を肯定的に捉え始めた学生もおり、さらに長期間にわたって続けていくことの必要性を感じている。

② プログラムを通じて、学生の成長を実感した社会人基礎力の要素は何か。また、それは、どんな場面のどんな出来事（または、どのようなことをチャレンジさせ続けたこと）がきっかけとなったと思うか。

――　成果の学内発表、グランプリ予選会、各種行事における PBL 取組みの紹介など、学生たちは大勢の前でプレゼンテーションをする機会が数多く、そのたびごとにこちらから何も言わなくても動く「主体性」や仲間を巻き込んで形にしていく「働きかけ力」、初めて聞く人にもわかりやすく伝える「発信力」は目に見えて伸びていったように思う。またこれらの力は彼らが現在就職活動に取組む中で遺憾なく発揮されていると感じる。

――　月曜１限の授業に遅刻欠席をしないことをクラスの共通の約束事にして、事あるごとに「規律性」に触れてきたことから出席や時間厳守に対する意識は確実に高まっている。

③ プログラムを通じて、日頃大学で学ぶ専門知識や一般教養の必要性や、教職員自身の能力向上に気づくことはあったか。

―― PBL は学部横断の授業であるため、それぞれが日頃学んでいることを PBL 活動に活かすことができる。メンバーに刺激され他学部の授業を取りに行った例もある。

―― PBL はゼミではないので教員自身も企業の提供課題で必要とされる分野について勉強を重ねる必要があった。

―― 教員の能力向上に当たるかどうかはわからないが、学生の変化を待つ、簡単に口出ししない、という気長さは身に付くように思う。

④ 今後どのような指導を行っていきたいと思うか。

―― 本学の PBL では学生の内面の成長を測定するアセスメントを実施しているのが一つの特徴であるが、学生の評価においては十分な注意が必要である。ひとつは、評価することで学生が評価されるように動いてくる、いわゆる「点数稼ぎ」が生まれる危険性。もうひとつは、アセスメント結果のフィードバック方法。単に結果を印刷した物を返却するのではなく、個別によかったところをしっかりと承認しながら併せて今後取り組みたい課題を共有する、という丁寧さが必要なのではないか。

―― 課題を前にして、学生たちはまず机の前で「頭で考えよう」とする傾向が強い。しかし、教員としては企業や実社会で仕事をする方たちと関われるという PBL の特長を活かして「まず動く」「まずやってみる」という活動を学生たちに促していきたい。

（３）プログラムに協力した企業・団体等 外部協力者の声

（近畿経済産業局施設広報誌「パワフルかんさい」2009 年 12 号掲載より）

企業等から提供された課題に 2・3 年次生がチームを編成し、リーダーとフォロワーの役割を担い課題に挑戦した。協力先の担当者と十分な打ち合わせを行い、各企業等内で実際に解決すべきリアルな課題を提供していただきながら、学生が思考を深め、学習に展開できるため課題の設定を目指した。

また、協力企業等には、授業に参画いただき、課題の解説、活動に対するアドバイス、活動への取組みや報告に対する評価をお願いするほか、現場のフィールド調査などの機会を提供していただいた。企業側の大きな支援のもと、社会人基礎力で繋がれた大学と企業との協働による人材育成プログラムが実現することになった。

平成 21 年度提供いただいた課題と担当者から企業で求められる社会人基礎力についてとこのプログラムに参画した経緯を感想コメントとしてまとめた。

◆株式会社　モリタ製作所

課題：「『人にやさしい診療空間』今までにない新型歯科診療台（チェア・ユニット）の構想」

〇企業で求められる社会人基礎力

・考え抜く力
・発想力
・困難に立ち向かうチャレンジ精神

〇参画にいたった経緯

グローバル化が進む中、「スピード・品質・コスト」競争力を、さらに高める高度な専門能力に加え、考え抜く力・発想力・困難に立ち向かうチャレンジ精神が必要となります。

教育現場における PBL（社会人基礎力育成）教育の実践方法や受講者の成長を直接見て話して感じる事により、今後の社内教育や採用活動に活かせるではないかと参画いたしました。

◆タキイ種苗株式会社

課題：「将来の日本農業のあるべき姿と、種苗メーカーが果たせる役割は何か」

〇企業で求められる社会人基礎力とは

今、特に求められるのは、3 つの社会人基礎力のなかでも「考え抜く力（シンキング）」と「前に踏み出す力（アクション）」だと思います。従来の業務（事業）内容に対して常に疑問と改善の意識を持って課題を見つけ出し、その解決に向けて他者を巻き込んで主体的に行動する力が必要だと感じます。

〇参画に至った経緯

まずは、企業と大学が連携を図り、学生が長期間にわたって 1 つの課題解決に取組むという内容に共感したことが最大の理由です。また、近年、農業の重要性が見直されつつあ

るなかで、学生の方に農業や食というものについて、真剣に考えていただく機会としても活用できるのではないかと思い参画いたしました。

◆株式会社　一保堂茶舗

課題：「大学生対象の日本茶の魅力体感型イベントの企画提案」

〇企業で求められる社会人基礎力

特に注目している社会人基礎力は「巻き込み力」です。学生にとってコミュニケーション能力が「人と上手に話せる力」と解釈されがちですが、企業としては「何かを成し遂げるために人を巻き込む力」をコミュニケーション能力と考えています。チーム活動を通じて、価値観の相違を容認する視野、相手の立場を想像する力、壁を乗り越えられる意志、他者を巻き込む責任感として「巻き込み力」が今求められています。

〇参画に至った経緯

日本型インターンシップが企業主導となることで、単に採用活動早期化を促している側面を持ち、大学全入時代と呼ばれる日本の教育システムにおけるインターンシップの今後に疑問を持ったからです。就職活動時にようやく「自分に何が向いているか」「何がしたいのか」を考え始めるのではなく、早期から意識を高めるための大学主導のプログラムが必要と考え、PBL にその可能性を感じたからです。

◆京都産業大学

課題：「社会人基礎力が付く、学生による、学生のためのカリキュラム・マップの作成」

〇企業で求められる社会人基礎力

大学の場合、社会人基礎力に関しては、組織運営に携わる事務スタッフのみがクローズアップされがちです。しかし、教育・研究スタッフの教育・研究活動にもそれは必要な能力なのです。研究活動にも社会人基礎力は不可欠であり、とくに、人を対象にしている教育活動には、社会人基礎力12要素のうちのどれ一つも欠くことはできません。

〇参画にいたった経緯

社会人基礎力を大学内に広めるにあたって、教育・研究スタッフや事務スタッフの側のみならず、学生側にも直接訴える必要を感じ、この課題を提供しました。その際、大人の感覚で大学側がマップづくりをしてしまうと、学生にとってはまったく面白みのないものになってしまいがちです。そこで、学生の感性を生かそうと考え、この授業の課題として提起しました。

2009 年度　O/OCF - PBL2・3　課題提供企業別アンケート集計

9 月 26 日（最終授業）実施　　回答数：4 社
協力企業：4 社（モリタ製作所・タキイ種苗・
一保堂茶舗・京都産業大学）

◆回答基準

①プログラム全体の満足度

5	4	3	2	1
非常に満足	満足	普通	やや不満足	非常に不満足

②課題報告成果

5	4	3	2	1
非常に満足	満足	普通	やや不満足	非常に不満足

③全プログラム期間

5	4	3	2	1
長すぎる	やや長い	適当	やや短い	短すぎる

④学生の取組みについて

5	4	3	2	1
十分にできた	できた	普通	やや不十分	全くできなかった

◆回答結果

回答企業	質問 1	質問 2	質問 3	質問 4
A	4	4	3	3
B	3	4	3	4
C	4	3	4	3
D	5	3	2	4

１．課題報告成果：具体的に

・取組み期間の割には学生との関わりが浅い印象。その中で学生はよくテーマを掘り下げてくれた。
・インターンシップのコストパフォーマンスとの比較
・きめ細やかな学生に役立つプログラム

４．学生の取組みについて：具体的に

・弊社以外にも多方面に取材、情報収集を行ってくれた。少し始動が遅かった。
・十分がんばりは見れたが、企業との関わり方は受け身だった。
・授業以外でもっと積極的にアプローチしてほしい。

５．効果があったと感じられるもの

◆回答基準

大変良い	ある程度良い	全くない	不明
◎	○	×	―

◆回答結果

回答企業	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力
A	◎	○	○	○	○	×	―
B	○	○	○	○	○	―	○
C	◎	◎	○	◎	○	○	◎
D	◎	◎	◎	○	○	○	◎

回答企業	傾聴力	柔軟性	情況把握力	規律性	ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力
A	○	○	○	○	○
B	◎	―	―	―	―
C	◎	◎	◎	◎	○
D	○	○	○	◎	◎

６．御社にとってプラスになったこと。

・当社について、歯科業界についての PR ができた。
・6 名という少人数であるが、農業について真剣に考えてもらう機会を与えられた。
・当社の PR、大学様とのつながりが深まった。学生への会社の説明はより自社を理解するのに至った。
・学生目線の“キャンパス・ライフ”の大切さ、参考になりました。

７．意見

協力企業：（株）モリタ製作所

意見、感想については授業、意見交換会で述べさせて頂いた通りです。

協力企業：タキイ種苗株式会社

箇条書きで恐縮ですが何点か挙げさせて頂きます。
・先述のとおり、チームとして意見交換が出来る体制になるまで時間を要した印象です。本年は合宿を事前に行われた様ですが、そのあたりのサポート、動機付けが必要かもしれません。
・時間の割には学生との関わりが浅かったという印象です。テーマを提供した企業が“困るくらい”“嫌がるくらい”の学生からのアプローチを期待していただけに少し拍子抜けした感がありました。
・「社会人基礎力」が強調され過ぎて学生が誤解されているように思います。「社会人基礎力」を身に付けることは確かに目的かもしれませんが、それも自分自身が仕事をするため社会人となるためのプロセス、手段方法の 1 つであると思うのですが、「社会人基礎力」を身に付けることが最終目標となることには違和感を覚えます。

協力企業：（株）一保堂茶舗

非常に有益な授業だと思う。真剣にがんばれば、学生が得られるものは社会人基礎力の他にも色々あるのではないか。インターンシップと異なるのは、リアルな仕事を体験できないことであり（比べるものではないかもしれませんが）、どうしても学生は頭でっかちに

ならざるを得ないのが今後の課題だと感じた。論理性や概念の説明にとどまり、では実際のところやれるのか、やるためにはどうすれば良いのかなどのさらに深い議論までには到達できない。ゼミの発表が最終目標である限り、授業の枠から出ることができず、就職活動において PR できるものなのかは難しいと思う。企業との接触で一般の学生より多少良い違った経験はしているが、チームで大小問わず企画を作り上げるという場面でさらなる成長につなげていって欲しい。

協力企業：京都産業大学

チーム全体の報告を受けましたが、課題解決に向けた学生個々人の取組や役割がどのように展開されてきたのか大変気になります。

（４）プログラムを受講した学生の進路

2009 年 3 月卒業生　主な就職先

（学）京都産業大学・京都府警察本部・近畿産業信用組合・瀧定大阪（株）・東洋製罐（株）・日本生命保険（相）・（株）ノーリツ・りそなグループ・ワタミグループ

2010 年 3 月卒業予定者 主な就職内定先

淡路信用金庫・イズミヤ（株）・ＳＭＢＣフレンド証券（株）・花王カスタマーマーケティング（株）・京都銀行・京都電子計算（株）・住友生命保険（相）・中央倉庫・帝国データバンク・デンソー関西・富山県警察本部・ニトリ・ノバルティスファーマ（株）・ファイザー（株）・船井総合研究所・北陸通信工業（株）・三重県庁・郵便局（株）（日本郵政グループ）・郵便事業（株）・りそなグループ・労働基準監督官

【五十音順にて標記】

（５）来年度以降の展開

来年度以降の展開について学内と学外とに分けて記載する。

① 学内

ｉ）継続して実施する取組み

ａ.社会人基礎力育成授業「O／OCF―PBL １・２・３」の拡張
今後５年間で、１学年 300 名（１割体制）体制を実現する。

ｂ.シラバスに社会人基礎力を明記する件については、予想以上の実績をあげ、全学の全科目ついて導入されることになった。今後は、推移を見守り、改善に努力する。

ｃ.社会人基礎力学内普及のための学内研究会を開催するとともに、大学の授業公開イベントに参加する。

ⅱ）新規に予定されている取組み

ａ.この取組みで開発されたノウハウを、経営学部の専門科目であり、経営学部所属の１年次生全員が履修する「基礎セミナー」に活用し（来年度は一クラスのみ)、ノウハウの汎用化を図る。

②　学外

ⅰ）継続して実施する取組み

a. 社会人基礎力養成新入社員研修（京都商工会議所）
b. 社会人基礎力トレーナー養成セミナー（京都経営者協会）
c. 京都未来を担う人づくりサポートセンター人材育成講座（京都府緊急雇用対策基金）
d. フォーラムの開催
e. 学会報告・雑誌投稿

ⅱ）新規に予定されている取組み

ａ．　社会人基礎力育成の武器になるコーオプ教育推進ネットワークの設立・運営